

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：30112

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520518

研究課題名(和文)「外邦図(朝鮮)」による朝鮮地名・朝鮮語研究

研究課題名(英文) A study on placenames in "Maps of the areas outside the Japanese territory prepared by former Japanese army(Korea)"

研究代表者

水野 俊平 (Mizuno, Shunmei)

北海商科大学・商学部・教授

研究者番号：70438399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：「外邦図(朝鮮)」は朝鮮で最初に刊行された5万分1地形図である。この地形図の地名には漢字の地名にカタカナで振り仮名が付されている。この振り仮名を通して、当時の朝鮮地名の実相を明らかにすることができる。調査の結果、地形図から44、181個の地名を抽出することができた。この地名の読み方を分析した結果、音読・訓読・音訓混合の3種類が混在していることが判明し、約65%が音読であった。また、同じ地点に幾つかの地名が併存する「多重性」を備えていることが明らかになった。

「外邦図(朝鮮)」の地名を分析した結果、文献資料では把握できなかった古語の分布や方言語彙の分布、音韻変化の様相を解明することができた。

研究成果の概要(英文)："Maps of the areas outside the Japanese territory prepared by former Japanese army(Korea)" is a published 1/50,000 topographical map first in Korea. The place name of this topographical map is transcribed in a Chinese character, and the method to read of place name is displayed in katakana. Through this katakana, we can clarify a method to read of the then place name. As a result of investigation, I was able to extract 44,181 place name from a topographical map. The place name is read in pronunciation of a Chinese character or it is read in Korean rendering of the Chinese character. There are some place names that both methods are mixed.

In addition, it was revealed that some place name included the coexistent "multiplex nature" at the same spot. I analyzed the place name of "the foreign country map" (Korea) and was able to clarify the distribution of the archaic word of Korean, distribution of the dialect vocabulary, the aspect of the phonological transition.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：朝鮮の地名 外邦図 地名の読み方 音読・訓読 朝鮮語古語 朝鮮語方言 地名の変化 朝鮮語の音韻

1. 研究開始当初の背景

(1) 朝鮮半島においては、19世紀末まで漢字・漢文が主たる表記手段・書記手段として用いられたため、ハングルで書かれた資料が相対的に少なく、近世以前の朝鮮語の様相を把握するのに困難を伴うことが多い。特に地名においてはその傾向が著しく、朝鮮時代の地誌・地形図・戸籍などにおいても地名は概ね漢字で表記されており、それを当時どう読んだのかはその表記からは知ることができない。

(2) 地名の訓読にはその地域の方言が含まれているものが多い。また保守性が高いため古代朝鮮語の痕跡をとどめている可能性が高く、その資料的価値は非常に高い。しかし前述したとおり、その読法が現在まで伝わらないものが多く、朝鮮語研究の資料としては活用しにくい。これは韓国の研究者もひとしく指摘するところで、地名の読法の解明は韓国・朝鮮語学研究(地名、方言、古代朝鮮語)の発展に不可欠なものである。

(3) 韓国においても朝鮮時代の地誌・地形図・戸籍・族譜・金石文などの漢字表記などから地名を抽出し、その訓読を推定し、朝鮮語語彙を復元・再構しようとする研究が行われている。しかし、地名が漢字のみで表記され、その読法が伝承されていないなどの困難が伴い、大きな進展を見るに至っていない。さらに1910年代に日本の植民地当局によって行われた土地調査事業に伴って、地名が大々的に整理され、その際に訓読された地名や朝鮮語を漢字で借字表記した地名が新しい漢字地名に置き換えられた。その結果、地名を漢字音でそのまま読む地名が増加したという経緯がある。

(4) しかし、19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本が作成した地形図である「外邦図(朝鮮・略図)」(以下、「略図」と呼ぶ)には、ほぼ全ての地名(漢字表記)に当時の朝鮮語呼称を反映したカタカナの振り仮名が付されており、既存の資料の限界を補完する貴重な資料と言える。この「略図」の地名および振り仮名を解析することで、19世紀末～20世紀初頭の朝鮮半島の地名の実相が把握できる。

2. 研究の目的

(1) 19世紀末～20世紀初頭に日本が作成した「外邦図(朝鮮)」の地名に付された振り仮名を調査し、近代化以前の朝鮮半島全域にわたる地名の読法(読み方・呼び方)を明らかにする。

(2) 調査された地名の表記と読法を分類し、その分布を解明する。

(3) 地形から復元された韓国語語彙を古代朝鮮語研究、韓国語方言研究、韓国語史研究の資料として活用する。

3. 研究の方法

(1) 資料の収集及び整理

研究の対象になる「略図」は484面で構成されている。そのうち445面は国立国会図書館に所蔵されており、これを複写して収集する。国立国会図書館に所蔵されていない39面は御茶の水女子大学・東北大学・京都大学総合博物館に所蔵されている「略図」で補充する。さらに補助資料として有用だと認められる1910年代初めに測地された「外邦図(朝鮮・地形図)」(1909年～1911年測地、以下、「地形図」と呼ぶ)や「外邦図(朝鮮・基本図)」(1914年～1918年測地、以下、「基本図」と呼ぶ)も複写して収集する。

(2) 資料の画像データ化

収集した「略図」をスキャナーで読み取り、ArcViewプログラムに読み込む。

(3) データベースの作成

ArcViewプログラムに読み込まれた地形図から地名を抽出し、各地名に番号を付与し、地形図の名称と01から25までの分割番号、漢字地名、漢字地名にカタカナで付された振り仮名を入力しデータベースを作成する。

(4) 情報の入力

作成されたデータベースに入力された地名を、振り仮名(振り仮名、以下「振り仮名」と呼ぶ)をもとに音読地名・訓読地名・音借地名・訓借地名・不明の5種に分類する。

(5) 振り仮名の対照

「略図」の地名(振り仮名)を「地形図」「基本図」の地名(振り仮名)と対照する。さらに『韓国地名総覧』(1966～1986)と対照し、「略図」地名の資料的価値を検証する。

(6) 朝鮮語語彙の解析

地名から抽出された朝鮮語語彙を近世・中世朝鮮語の語彙と対照し、どの程度の古形を維持しているのかを調査する。さらに地名に含まれた語彙が古い古代朝鮮語の形態を維持している可能性についても検証する。

(7) 語彙の地域差の解析

地名から抽出された朝鮮語語彙のうち、高頻度で現れる語彙を言語地形図で解析し、地域差がどの程度現れるのか、その地域差が実際の方言区分とどの程度一致するのか、その地域差がどの時代の方言区分に従ったものなのかを解析する。

4. 研究成果

本研究における研究成果は以下の(1)～(16)であるが、(1)～(10)は「略図」(および補助資料として用いた「地形図」「基本図」)に関する調査過程で判明した成果、(11)～(16)は地形図の地名に対する解析で判明した成果である。

(1) 本研究の研究対象である「略図」は484面であるが、このうち457面を収集することができた。

(2) 「略図」に記載されている地名は44,181個である。地名は平安道で緻密に調査されている反面、慶尚道では粗略に調査されており、資料として均質ではない点がある。その原因は、平安道の測図時期が最も遅く、戦略的に重要視されていた地域であった反面、慶尚道は測図時期が早く、戦略的な重要度が低いと見られていたためと思われる。また測図時の情勢変化も「略図」地名の粗密さに影響を与えていると思われる。

(3) 「略図」の地名のすべてに振り仮名が付されているわけではなく、振り仮名が一部省略された地名、まったく振り仮名が付されていない地名もある。これは測図時の調査の不徹底や、地名の採取を担当した通訳・通弁の言語能力の限界によるものと思われる。

(4) 地名に付された振り仮名は一定の法則に沿って行われたものではなく、表記者によって恣意的に行われたと思われる。これは同一表記の地名に多くの異なる振り仮名が付されていることから推測される。「略図」における地名表記と振り仮名の様相を図1に示す。

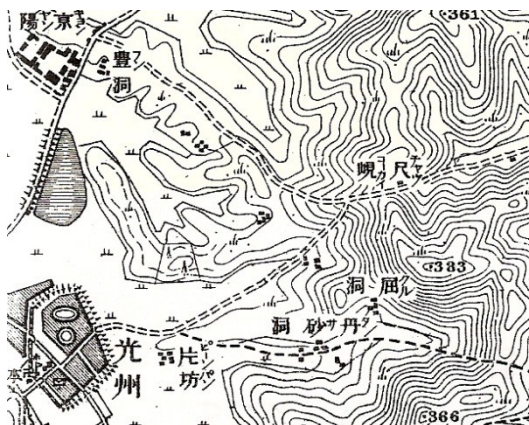


図1、「略図」地名と振り仮名

(5) 地名は注音の種類によって「音読地名」「訓読地名」に分けられる。ただし「音読地名」は漢字語地名を単純に朝鮮漢字音で読んだものだけではなく、固有語地名を一旦漢字の訓(字義)を利用して漢字で表記し、それを再び漢字音で読んだものも相当数が含ま

れる。「訓読地名」は地名の表記に用いられた漢字表記を訓読したものではない。固有朝鮮語地名を漢字の訓を用いて表記したものである。よって「訓読地名」というよりは、「漢字の訓を利用して表記された固有語地名」と呼ぶのがより適切である。また、一つの地名の中で音訓が混用された「音訓混用地名」が存在する。

(6) 「略図」の地名においては「音読地名」に属する地名が圧倒的に多く、概算ではあるが、全体の6、7割程度を占めるのではないかと推測される。「訓読地名」「音訓混用地名」を合わせても20%に満たない。このことは「略図」が測図された19世紀末～20世紀初頭にかけてすでに多くの地名が音読されていたことを意味する。

(7) 「音読地名」には漢字の字義を無視し音のみを借りて表記した「音借地名」が含まれ、「訓読地名」には漢字の訓のみを借りて表記した「訓借地名」が含まれる。しかし、これらをその表記をもとに判別することは難しく、地名の由来にまでさかのぼって判別する必要がある。

(8) 「略図」「地形図」および『韓国地名総覧』を対照すると、「音読地名」の表記には多くの変化がみられる。これは地名を表記している漢字に字義を無視した当て字が多く、表記が固定されていなかった地名が数多く存在することを意味する。

(9) 「略図」「地形図」および『韓国地名総覧』を対照すると、朝鮮の地名は同一の地名でありながら、複数の読み方(呼び方)が存在するものが多い。これは固有語の地名を漢字語で表記し、音と訓で読むからである。また、表記とは関係なく同一の地点に全く別個の地名が併存している場合もある。これを「(地名の)多重性」と呼ぶ。

(10) 「略図」の地名は「命名の類縁性」をあらわす「前部要素」と「命名の根拠」をあらわす「後部要素」によって構成されている場合が多い。

(11) 刊行年代の異なる「略図」「地形図」「基本図」を比較した場合、訓読地名の減少と音読地名の増加という現象が一貫して見られる。これは植民地地下で行われた地名変更の影響であると思われる。よって資料的価値の面では「地形図」「基本図」は「略図」に及ばないが、「略図」を補完する補助資料として用いることはできる。

(12) 「略図」から「城塞」をあらわす語彙を抽出した結果、わずかに新羅系の「冓」が内陸地方の山間部を中心に分布していることが明らかになった。その分布を図2に示

す。ただし、高句麗系の「忽」や百済系の「己」は見いだされなかった。「爻」は漢字語である「城」によって淘汰されるまで朝鮮語で用いられていたと考えられる。文献資料などから、中期朝鮮語までは用いられていたものと考えられ、その後は化石化した状態で地名に残されたと見られる。このことは「略図」によって遡及できる古語の年代をあらわすものとして注目される。すなわち、「略図」の地名に残された語彙の大部分は古代朝鮮語にまで遡るものではないということである。

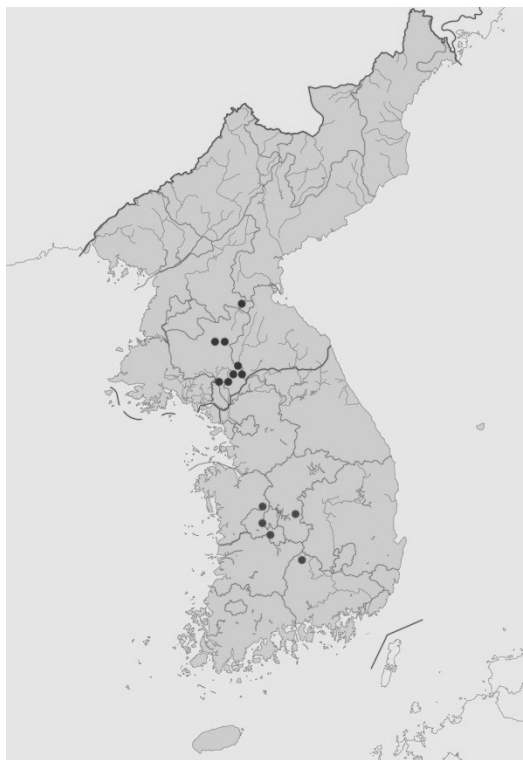


図2、「略図」地名における「爻」の分布

(13) 「略図」から「깊-」(深い)が含まれる語彙を抽出し、k口蓋音化現象の有無とその分布を調査した結果、既存研究で明らかになったk口蓋音化現象の分布とは異なる分布が見いだされた。すなわち南部地方においても、k口蓋音化現象を経験していないと見られる地域が見いだされたこと、咸鏡北道においてk口蓋音化現象を経験した地域としていない地域が見られること、および江原道においてk口蓋音化現象の境界とみられる地域が存在することなどが明らかになった。また、時間の経過とともに、k口蓋音化現象が拡散したと考えられる分布も見いだされた。以上の成果からも、「略図」の地名は通時的な研究が困難な方言学分野において有用な資料を提供するものと期待される。

(14) 「略図」から山岳関連地名を抽出し、その分布を調査した結果、「山」の古語である「뫼(뫼, 뫼)」の分布が明らかになった。

「山」を意味する朝鮮語語彙は「뫼」であったと考えられ、「뫼」は「뫼」に変化する一方、中部地方で「뫼」から新しい形態の「뫼」が生じ、次第にその勢力を拡大させていったものと考えられる。「뫼」は「墓」という意味でも用いられており、語義の衝突によって「뫼」が用いられるようになった可能性もある。その後、漢字語である「산(山)」によってこれらの語彙は淘汰されていき、地名に化石化した状態で残るようになったと思われる。以上の成果からも、「略図」の地名は韓国語史の分野において文献資料以外の資料を提供するものと期待される。

(15) 「略図」から地名の後部要素を抽出し、その分布を調査した結果、「동(洞)」「리(里)」「촌(村)」「골」などには地域的な偏在は見られなかったが、「실」「말(마을)」「기(基)」「울」「울」などは南部地方または中部地方に偏在し、「물」は黄海道に偏在しているということが明らかになった。一方で、新羅固有の後部要素とされる「伐」の出現は極めて限られており、百済固有の後部要素とされる「夫里」は現れなかった。後部要素は経年的な変化を受けにくいと思われるが、古代朝鮮語の後部要素を保存しているという可能性については、再考の余地がある。

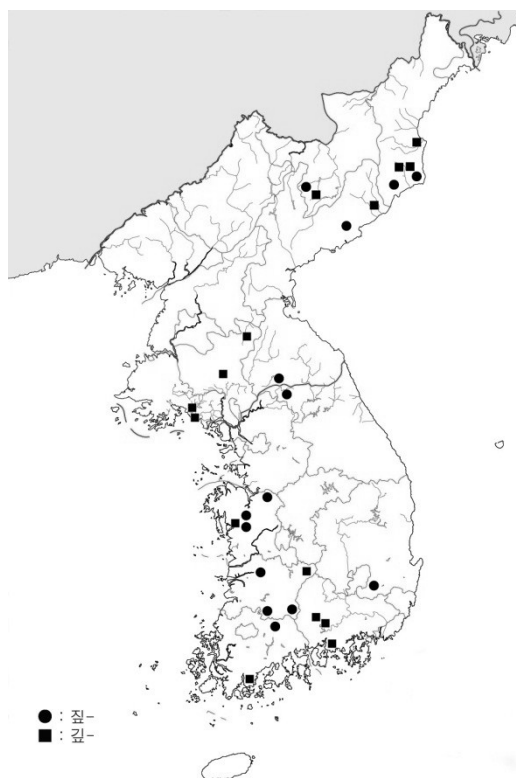


図3、「略図」地名における「깊-」「깊-」の分布

(16) 全羅北道益山郡金馬面に対する現地調査を実施した結果、「略図」に現れた地名の大部分が100年～120年後の現在ま

でも継承されていることが明らかになった。また、地名の多重性は地形図や『韓国地名総覧』によって判明したよりもはるかに複雑であることも明らかになった。度重なる行政区画改編と地名改変にもかかわらず、この地域の地名はその命脈を維持してきたものと見られる。しかし過疎化と農村住民の世代間格差により将来にわたって伝統的な地名が伝承されるのかについては予断を許さない状況である。

本研究の成果の詳細については、別途『「外邦図（朝鮮）による朝鮮地名・朝鮮語研究」研究報告書』を作成し、頒布している。

なお、以下のホームページにおいて持続的に研究成果を公開するとともに、「略図」の画像データと地名を公開し、韓国国内において地名情報の収集を行う計画である。

<http://blog.daum.net/ttanjigi>

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 水野俊平、「旧韓国末韓半島地形図」の資料的価値について、地名学（韓国地名学会）、査読あり、17巻、2011、pp. 105-140
- ② 水野俊平、外邦図（朝鮮・略図）における古代朝鮮語語彙、北海商科大学紀要、査読あり、2巻1号、2012、pp. 40-41
<http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/2166>
- ③ 水野俊平、「旧韓国末韓半島地形図」に現れたk口蓋音化現象について、『地名学』（韓国地名学会）、査読あり、18巻、2012、pp. 75-95
- ④ 水野俊平、「旧韓末地形図」に現れた「mae」などの分布様相について、『地名学』（韓国地名学会）、査読あり、19巻、2013、pp. 71-89

[学会発表] (計5件)

- ① 水野俊平、「旧韓末韓半島地形図」の資料的価値について、韓国地名学会、西原大学校（韓国）、2011年10月21日
- ② 水野俊平、「旧韓末韓半島地形図」の地名表記について、朝鮮学会、2012年10月6日、福岡大学
- ③ 水野俊平、「旧韓末韓半島地形図」に現れたk口蓋音化現象について、韓国地名学会、韓国学中央研究院、2012年10月26日
- ④ 水野俊平、「外邦図」地名注記による語彙

分布解明の試み、朝鮮学会、天理大学、2013年10月13日

- ⑤ 水野俊平、山を表す「mae」「mi」の分布に対する国語史的考察—「旧韓末韓半島地形図」の地名注音を通して、国語学会（韓国）、梨花女子大学、2013年12月14日

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://blog.daum.net/ttanjigi>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野 俊平 (MIZUNO, Shumpei)

北海商科大学・商学部・教授

研究者番号：70438399